



いのち・性・AIDSを見つめる Living with AIDS

211 号のニュースレター

1 面	世界AIDSデー in Yokohama 報告	清治ヒロ
2 面～3 面	第 31 回日本エイズ学会参加報告	清治ヒロ
4 面～6 面	神奈川県立綾瀬高校出前講座報告	堀尾 吉晴
7 面～8 面	書籍紹介	お知らせ

世界AIDSデー in Yokohama に参加して

日時：11月18日（土）11時から16時30分

会場：新都市プラザ

報告 清治 ヒロ

恒例の企画イベントですが9時過ぎに到着したらずでに機の準備ができていました。9時半から横浜AIDS市民活動センターのスタッフの方や参加団体との打ち合わせです。一日のスケジュールや注意事項を確認し、各団体のスペースで準備を行い、ANYも看板がよく見えるようにしたり、パズルやリボンを整えたり、クリスマスツリーの飾りつけ等をして11時からのスタートを待ちます。

11時、世界AIDSデーの目的やエイズの現状を説明するアナウンスと共に活動の開始です。

ANYは、子ども向けのパズルとおとなの方にはレッドリボン作成で、道行く人に声をかけ参加を呼びかけます。午前中は人通りが少ない





中でしたが、子ども連れの人を中心にパンフレットを渡しながらか呼びかけます。午後になると人手が多くなり子どもたちの人数も増えてきました。難しいパズルに挑戦した姉を待つ間に、3〜4種類のパズルをやった子どももいました。

笹田理事長のお孫さんの竹原さんが今年もボランティアで参加してくれました。呼び込みや着ぐるみのコムちゃんに入って汗びっしょりになりながらの活躍が頼もしかったです。



パズルの参加人数は85人、レッドリボンの作成参加者は33人でした。16時30分にイベント無事終了です。片付けの後解散しました。お疲れ様でした。

第31回日本エイズ学会参加報告

報告 清治 ヒロ

2017年11月24日〜26日の3日間、中野サンプラザ・コンgresクエア中野で第31回エイズ学会が開始されました。第1回目は1987年京都で開催され、それ以降毎年開催されてきました。私は、今回初めての参加で25日26日の2日間参加しました。

シンポジウム「診療を拒否された私を受け入れる歯科ネットワーク」の報告をします。

東京都のエイズ診療協力歯科医療機関（東京52か所）についての報告

【歯科医からの報告】

- ・ 口腔内のカンジダを見たら、HIV感染を想定して診療することが大切。
- ・ 当事者が感染を知らないことも多いが、自分から感染を話す患者さんもいる。
- ・ 自ら話してくれる人は、病気を理解して治療を受け入れている。

- ・ 診療拒否はあってはならない。拒否する開業医が増えている。中には、自分は拒否して、他院や大学病院を紹介する人もいる。
- ・ その改善には、歯科医への教育をしっかりと行うこと。
- ・ 現在、エイズ診療協力歯科医療機関は都内 52 か所あるが、協力事業を都内に全面的に進めていきたい。
- ・ 自分は「エイズ診療協力機関」の看板を出している、また受診する方にアンケート（H I Vについての）をしたが、影響はほとんどない。
- ・ 患者をはじめ市民への教育が大切である。

【沖縄の歯科医から】

- ・ 2016 年の感染者数 339 件 全国 3 位（3 年連続）
- ・ いきなりエイズ 3 0 % くらい、その前の歯科医受診はあると思う。
- ・ 行政と協力しながらネットワークを広げたい。
- ・ スタッフの協力を得るには正しい知識を得ることが大切で、研修会参加を勧めている。

【感染者からの報告】

- ・ 数年前に感染を知るが放置していた。体調を崩してから健康の大切さに気づき、生活に気をつかうようになった。
- ・ 「協力医」の看板を見つけ受診した。すんなり受け入れてくれ安心できた。
- ・ 歯科衛生士の指導が詳しく聞けた。自分の意識も変わってきた。
- ・ 他の感染者の意見を聞いたら、医師に黙って診療を受けている人がいることを知り、自分がこのような場で発言することにより主治医に告知するきっかけになるのではないかと考えた。

【参加しての感想】

教育が大切だと改めて思った。感染しても薬があるから、発病しないからと安心してしまふ危険もある。薬は高価であり一生飲み続けなければならないことを伝えることや感染経路や感染予防について機会があるごとに伝えることが大切だと再認識しました。

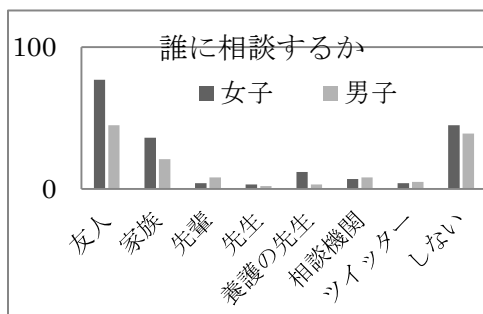
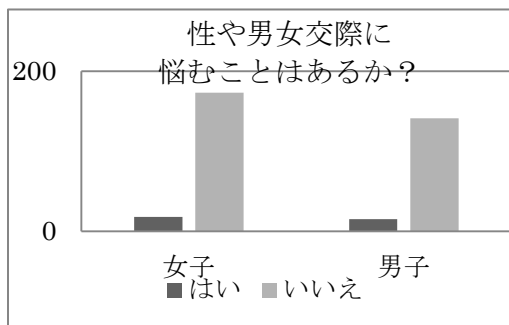
出前講座報告 神奈川県立綾瀬高校 1 学年 360 名

実施日：11 月 16 日

講師 堀尾 吉晴

神奈川県立綾瀬高校での S T I の講演に 11 月に行きました。昨年は 45 分で実施したのですが、「話し足りない。もう少し欲しい」という要請をしたところ、今年は授業で 2 時間分、講演 80 分、アンケートなどの HR 30 分をとってもらえました。おそらく、養護の先生が学年に強く働きかけていただいたのだと思います。ですから今回は、養護の先生の思いも入れられるように高校との事前打合せを 2 回持ち、パワーポイントも事前に送付し、調整しました。

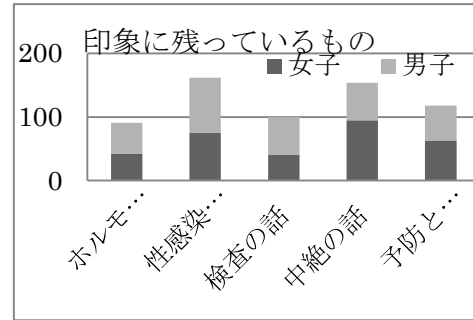
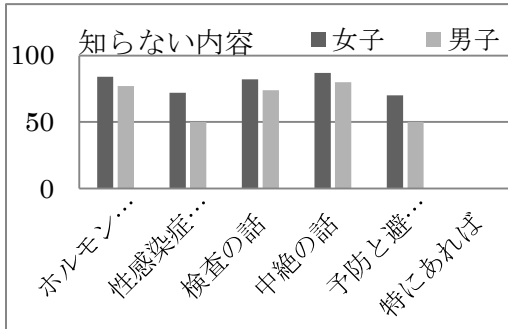
＜事後のアンケート集計＞ 女子 191 名 男子 156 名の計 347 名で、グラフの数値は実数を示しています。講演をする高校ほとんどで、同様な内容で実施してもらっています。アンケート提出数は、女子 191 名 男子 156 名の計 347 名で、グラフの数値は実数を示しています。



「第 7 回青少年の性行動全国調査 (2011)」の調査結果に見られるように、近年の若者の性的な活動は以前より不活発になっていますが、アンケートでも以前に比すと「はい」がかなり減少しています。逆に講演は「近未来」の話で、いいタイミングと思います。

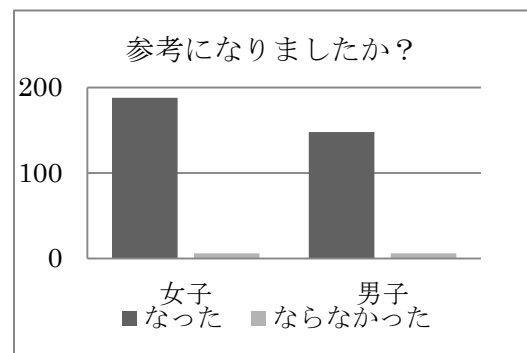
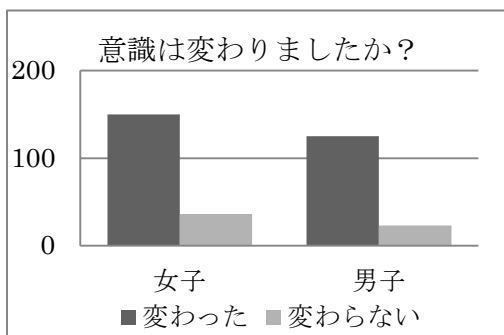
相談相手は変化がありません。一番多いのが「友人」であることが問題で、同年齢の友人が適切かつ正確な情報を提示できるのか、「ツイッターに投稿するのと変わらないのでは」の懸念があります。信頼できる相談機関があるといいのですが。

講演の流れは、ホルモンの話から性徴・性自認の話、ヒトの性行為の話、性感染症、水の交換、検査、妊娠中絶、コンドーム・ピルの話、まとめ、の展開です。全般的に知らない中身が多かったのは講演として「成功」と言っているのでしょうかね。感染症と中絶は刺激的なようでした。



「意識が変わった」とする生徒が多かったことは講演する側にとって嬉しいのですが、今後それを強化する機会が必要だと思います。

「参考にならなかった」は男女とも6名ずつでした。「ちょっと少なすぎるかな。」が率直な感想です。生徒も様々ですから、私が教員だったときに「全員がこっちを向いているときは、自分の授業のどこかにファッショがあるのでは？」と、反省材料でした。「話が多样だったから、どこかに興味を引くところがあったのかな」と自分を納得させます。



＜生徒の感想から＞ 多くの生徒さんが感想を書いてくれました。

「自分には関係ないと思っていたけど、将来関係するなと思いました。全然知らなかったことも多かったけど、詳しくわかりやすい説明だったので参考になりました。」、「なかなか教わらないことなのでためになりました。」のような感想が多く、やった甲斐があります。知らなかったことを知る嬉しさ、性のことを「卑猥なこと」としてではなく受け取れる新鮮さを感じてもらえたら講演の意図は達成です。

「中絶の話は、今日聞かなかったらたぶん一生聞いてなかったと思う。本当にありがとうございました。」、「しっかりとした知識がないと、自分だけでなく相手も傷つけてし

まうのだと、深く学べたので良かったです。（同様意見多数）」などは、受身で聴くだけでなく、それを自分の中で評価していく姿勢を持っている生徒が多いと感じられます。

「例えや図がわかりやすかったです。また来てくださいね。」のような「判りやすかった」が多数あったのですが、元教員として、それをほめ言葉と取っていいものか？ 「新しい、難しいことを、易しく判りやすく伝える」のは教員の初歩の技術ですよ。生徒から、「先生は、先生として合格だよ」と認定されたのだと思ひましょう。

「水交換の感染力がすごかったです！」が、多数ありました。保健委員20人に出てきてもらって「男女で交換してごらん」、「同性同士で交換してごらん」などで行ったのですが、生徒は感染の広がりを実感しただけでなく、質問には「水の交換のとき、同性で交換したのはあえてのことなのかどうか。」という、鋭いものがありました。もちろん答えは「はい」ですね。

＜気持ちのいい講演会でした＞ 80分の予定でしたが、「このあとはHRだから・・・」と、休み無く90分話してしまいました。生徒さんも途中退出も無く集中して、楽しそうに聞いてくれていました。本当に充実感をもらった講演会でした。

なによりも、余裕のある時間を与えてもらったこと。それによって、急ぎ足でなく、生徒さんが考える時間を作ったり、生徒さんたちの中に入って答えを求めたりと、一方的でなく話ができました。そのことも含めて養護教諭の方の努力と、こちらとの密接な連携によるところが大きいと思います。

本会の出前講座の特徴は、必ず事前に訪問し、開催側の意図とこちらのレディネス、発想とをすり合わせています。今回は2度の訪問以外にも、メールでのやりとりも行いました。講演後の「生徒からの質問」も素早くまとめて送信されてきて、早速私の答えを送ることができ、廊下に掲示していただきました。

＜今後のあり方＞ 以前のような「H I V講演会」の要請は無くなりつつあり、広く「S T I」あるいは「性の話」の依頼がほとんどです。このことは「H I Vが新しい時代を迎えている」と捉えることも出来ます。薬剤の進歩で、「死ぬ病ではなくなった」ことと併せて、「感染させる危険も激減している」状況になっています。「感染していることを知ること」が「感染していないことを知ること」と同様に、「健康に過ごすこと」につながるのです。「H I V」を特殊と見ないで、他のS T Iと並列して話をしていくことも大切だと思います。（堀尾）

【書籍紹介】

『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』
～教育・福祉・医療・保健現場で活かすために～
UNESCO＝編
浅井春夫／艮香織／田代美江子／渡辺大輔＝訳
(明石書店)



本書は、ユネスコ（国連教育科学文化機関）UNAIDS（国連合同エイズ計画）を共同スポンサーとして、UNFPA（国連人口基金）、UNICEF（国連児童基金）、WHO（世界保健機関）、世界各国の実践者、専門者によって開発され、2009年12月に公表され2010年に出版されたものです。性教育実践についての共通基盤・国際的なスタンダードについて世界に向けて提起された文書です。日本では2017年6月に翻訳・発行されました。

本書の「はじめに」では、「今日、AIDSが蔓延する世界で、私たちがこの挑戦に對峙するということは、その流行を食い止めるための最も重要な機会である」と述べられ、「現在、十分な準備や教育を受けている若者はあまりにも少ないため、かれらは強制、虐待、搾取、意図しない妊娠、HIVを含む性感染症に対して脆弱な状況に置かれている。」と現状が語られています。そして、「・・・劣悪なところから見つけてくるであろう部分的な情報、誤った情報、あからさまな搾取といった暗雲の中で、自身の生き方を見つける子どもを放置するのか。あるいは、普遍的価値と人権を基礎にした明瞭で十分に詳しい科学的な基盤に基づいたセクシュアリティ教育に挑戦するのか。」と訴えています。

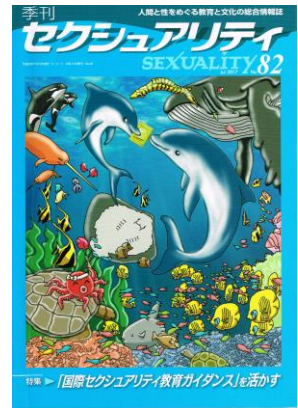
HIV感染予防のためには、性教育が欠かせない要素としているのです。

そして、副題に「教育・福祉・医療・保健現場で活かすために」となっているように国・地方自治体、学校・保健関係などの専門機関や団体が現場実践を進めていくことが求められています。本書は、第Ⅰ部と第Ⅱ部で構成され、第Ⅰ部では、セクシュアリティ教育（＊包括的性教育と同義）の論理的根拠に焦点を当て、効果的プログラムの特徴についてアドバイスが示されています。

第Ⅱ部では、5～18歳の子どもと若者のための異なる年齢段階ごとの基本的な学習内容項目と学習課題に焦点が当てられています。

本書を読み通すと、実際にANYで出前教育を行うにあたって、大切にしてきた内容を振り返ることができます。

翻訳本を読むことをお勧めしますが、『季刊セクシュアリティ82号』（2017年7月）は、特集で「国際セクシュアリティ教育ガイダンスを活かす」を編集し、実際にどのように実践に活かしていくのかを特集しています。こちらも、お勧めです。（中野久恵）



お知らせ

☆電話相談件数

10月 60件 （男 44 女 16） 11月 72件 （男 53 女 19）

☆JICA主催国際フェスタが開催されます

「AIDSの基礎知識」について堀尾事務局長が講師として講話を行います。ご都合のつく方は、お出かけください。

日時：2018年2月3日（土）14時10分から

会場：JICA横浜（中区新港2-3-1）



ANYニュースレター Living with AIDS

編集発行：特定非営利活動法人 AIDS ネットワーク横浜

〒231-0015 横浜市中区尾上町3-39 尾上町ビル9F

Tel：045-201-8808 Fax045-201-8809

ホームページ：<http://www.netpro.ne.jp/any/> e-mail：any@netpro.ne.jp